



大学図書館問題研究会京都支部 臨時総会報告

京都支部臨時総会が2005年1月22日(土)午後1時30分から京都市国際交流会館1階第1会議室において開催されました。総会参加者は10名でした。まず、議長(支部長)より【臨時支部総会議案】「大学図書館問題研究会京都支部規約(案)」について説明がありました。

京都支部は1978年10月21日(土)に結成されて以来、現在まで27年間支部活動を続けてきました。結成当初から、支部の運営は基本的には「大学図書館問題研究会」の会則に準じておこない、支部の会則をつくらずに活動してきました。しかし、会員に対しても、対外的にも、支部活動内容を明確にするうえで会則を制定したほうがよいと支部委員会で判断し、ここに「大学図書館問題研究会京都支部規約(案)」を提案しました。総会では一般会員から「総会が成立する要件として定足数を規定することが必要ではないか」という指摘がありました。これにたいして、「指摘はもっともであるが、今回の規約制定を将来の支部活動基盤の整備へのワンステップとしてとらえていただき、総会のあり方については今後の課題として考えていきたい」と説明し、「大学図書館問題研究会京都支部規約(案)」が承認されました。今後は、会員のみならず、気軽に参加できるような、また関心を持ってもらえるような総会をめざします。

(なお、今回承認されました支部規約案は支部報 No.229 に掲載しています。)

[目次]

大学図書館問題研究会京都支部臨時総会(2005年1月22日)報告	...	1
「京都ライブラリアン・セッション」に参加して	...	2
近畿4支部新春合同例会(2/5)に参加し考えたこと	...	3
シンガポールの教育政策と図書館	...	4
図書館あれこれ	...	7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール : dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

「京都ライブラリアン・セッション」に参加して

井上 雅人

1. はじめに

ここ数年、大学図書館問題研究会京都支部ではセミナー等、会員の研究発表の場を積極的に提供しています。取り上げるテーマもタイムリーなものも多く、毎回どのようなテーマを取り上げるのか、いつも注目しています。今回の「京都ライブラリアン・セッション」も私の業務に密接に関連するものばかりで、とても有益なものでした。以下では大雑把ではありますが、私の感想を述べたいと思います。

2. 「May I help you? : プッシュ型のレファレンスサービス」福井京子氏

「知る人ぞ知る」京大教育学部図書室の福井さんのお話はまがりなりにも同じレファレンスを担当する者として、とても示唆に富むものでした。特に学部生の教育力、学ぶ力と図書館サービスをどう関連させるか、という課題をこの1年間悩んできた私にとって、福井さんが実践してこられた経験は大いに参考になりそうです。インターネットの時代に、利用者の顔が見えるレファレンスサービス、利用者から頼りにされるライブラリアンをめざす、その姿は大いに参考とすべきだと思います。ただ2万名もの学生をサービス対象とする本学図書館との条件面での違いは痛感させられました。

3. 「学部・学科図書館における電子的図書館サービス」進藤達郎氏

同じようなことは2番目の進藤さんの報告でも感じました。そもそも学部・学科レベルでの図書館というものが存在しない立命館の場合、電子図書館サービスというものも図書館(中央館とはいいませんが)レベルで考えざるを得ません。すべて(中央)図書館がやらねばならないのです。進藤さんが提案された「できそうなこと・その1ー各種申請・依頼文書のオンライン化、その3・簡易なオンライン・チュートリアル」等は、本学でも準備にかかっております。ただ「できそうなこと・その2ー分野に特化したリンク集の作成」はどうしても不十分にならざるを得ません。教員や院生レベルの利用者の本学図書館に対する不満もこのあたりにあるように思いました。

4. 「大学図書館のボロイングポリシー：貸借資料の複写可否」吉野貴庸氏

3番目の報告はとりわけ興味深いものでした。というのはこの問題は本学図書館のカウンターで結構トラブルのもとになっていたからです。貸借資料の複写について以前はそれほど厳しく対応していなかったのですが、複写機にかけたことによるものか、資料の破損が多発しました。これは受付館との信頼関係にも関わる重大な問題ですので、カウンターで事前にアナウンスし、チェックも厳しくおこなうようになりました。その結果、貸借の申込みが減少し、複写に切り替えるケースが増加しています。吉野氏はこの問題について639の図書館のホームページを調査されたそうですが、まずそのご苦勞に対し敬意を表します。調査結果から、貸借資料の複写を不可とする理由が、各館によってさまざまなこと、それが「閲覧」といった利用方法の考え方の相違によるものであり、ボロイング・ポリシーの案内も公表するだけでなく、わかりやすい案内が必要なことなど、が提案され本学でもすぐに対応できそうな内容であったように思います。

5. 「見たい! 行きたい! 海外図書館：どう準備し、実践するか?」江上敏哲氏

最後は本学でもいつも何かとお世話になっている江上さんの報告でした。江上さんの報告は「女性研究者」をテーマにしたユニークなものを以前聞いた記憶があり、とても印象に残っています。「着眼点が面白いなあ」と感心させられました。今回のテーマも海外図書館の調査について、目的

の設定や準備の進め方から結果のまとめまで、明白なようで、実のところあまりわからない貴重な体験を聞かせていただきました。特に訪問先の選定で「運営が決して順風満帆でないところ」といったお話では「どうして？」と首をひねる場面もありましたが、ちゃんと話を聞けば「なるほど」と納得させられる、江上さん独特の発想のユニークさを感じました。私は江上さんのテンポのよくて、しかもわかりやすい語り口が大好きです。

以上、本当に粗雑で申し訳ないのですが、私の感想です。このセッションのような個人の研究成果や実践が数多く出てくるところに、大図研京都の人材の厚さを感じました。現在、私の担当しているレファレンスサービスや ILL の問題で、意見交換したいテーマが数多くあり、今後ともこのような場が継続的に開催されることを願うものです。

いのうえ まさと（立命館大学衣笠メディアサービス課）

近畿4支部新春合同例会(2/5)に参加し考えたこと

大綱 浩一

1. はじめに

合同例会では、大阪教育大学講師の高鉦裕樹氏から、(1)アメリカ図書館協会における現職図書館員研修に関する活動、(2)ALISE 報告(*1)から見た認定校における現職図書館員研修の実施状況、(3)主要大学における研修プログラムの特色、について紹介があり、(A)研修プログラムは概ね実践的かつ技術的な内容であり、既存の見識や技術のアップデートおよびフォローアップを目的としている、(B)研修プログラムは活発に提供そして利用されている、(3)活発な提供と利用の背景には補助金や税制優遇などの制度が存在している、ことなどが指摘されました。

2. 参加し考えたこと

今回、合同例会に参加したことをきっかけに、これまで研修について何となく考えていたことを、少しまとめてみました。

2.1 研修とは

広義には研き修めることだが、狭義には職員教育を指す。組織が目的を達成するためには、その目的を達成できる人材の確保が必要不可欠である。そのため組織は研修(狭義)=職員教育を実施する。組織が主導する研修(狭義)は人材育成の一手段であり、研修(狭義)を行うか否かは組織が決定する。そして、この場合の研修(狭義)への参加は職務上の行為となる。このような研修(狭義)には、時系列(新人など)研修、業務別(目録など)研修、職場内研修、職場外研修などがある。

2.2 自己研鑽とは

現代社会では平均年齢が長期化する一方で、社会変動の激化に伴い知識は急速に陳腐化するため、学校教育で学習した内容も生きていく内に時代遅れとなってしまう。個人が目的を達成するためには、継続的なキャリアの形成が必要不可欠である。そのため個人は自己研鑽=継続学習を実施する。個人が主導する自己研鑽はキャリア形成の一手段であり、自己研鑽を行うか否かは個人が決定する。そして、このような自己研鑽もまた研修(広義)=能力開発の一形態である。

表. 研修と自己研鑽

研修(広義)=能力開発	【主体と目的】
●研修(狭義)=職員教育	組織による人材育成(*)
●自己研鑽 =継続学習	個人によるキャリア形成

(*)研修(狭義)以外の人材育成：配置転換、人事交流など。

2. 3 研修と自己研鑽の関係

ここでは研修(広義)の、主体と目的から見た特性を分かりやすく表現するために、便宜上、研修(狭義)と自己研鑽を対比的に位置付けたが、現実には二者択一の、相互排他的な関係にあるわけではない。個人がキャリア形成の一手段として研修(狭義)を捉えることもあれば、組織が人材育成の一手段として自己研鑽を支援する事例も見られる。能力開発という意味では、むしろ個人にとっても組織にとっても両者が相互補完的に機能することの方が望ましい。主体と目的が異なる研修(狭義)と自己研鑽を相互補完的に機能させるには、両者が持つ特性の違いを正しく理解し、研修(広義)にあたるのが重要である。

参考資料

- (*1)Association for Library and Information Science Education
<http://www.alise.org/>
 Library and Information Science Education Statistical Report
<http://ils.unc.edu/ALISE/>

おおつな こういち (京都大学附属図書館)

「シンガポールの教育政策と図書館」

福井 京子

シンガポール政府は、1980年の「国家コンピュータ化計画」に始まり、1992年の「IT2000」、2001年の「ICT21」に至るまでのITハブ化戦略を一貫して押し進めてきた。とくに、「IT2000」は、その実行計画である「シンガポール・ワン(Singapore-ONE、ONEはOne Network for Everyone)」を通して、世界の中で最も早い時期に高速インターネット環境や行政サービスのネット化を達成した。

Library2000は、「今後の社会発展における情報の重要性に着目して作成されたIT2000と軌を同じくするもの」(1)であり、「図書館がシンガポールの目指すところの学習国家(a learning nation)を支える重要な要素であると位置づけ、そのための総合的な施策を提言」(1)したものである。Library2000には、6つの戦略目標があり、それに基づいて新しい図書館のシステム改革が推進された。(前号・拙稿・「参照」)

その結果として、今回NLB(National Library Board)が切望した、シンガポールのビジネス分野での最高の賞であるSingapore Quality Award: SQAを受賞したのである。

当初、10年ないしは20年で実現されるという見通しであったこの構想が8年で実現した理由

を私たちは、ニュースレター（2004年8、9月号）の中でみることができる。

このLibrary2000構想による、シンガポールの図書館改革には、それを可能させた重要な3つの推進役があった。

- (1) 組織的なリーダーシップ:「学習国家としてのシンガポールを発展させていくために図書館システムを活性化する」(1)ための柔軟で、効果的なマネジメントシステムを心がけた。このリーダーシップこそが、この構想改革の土台となっている。NLBのトップ経営チームは共通した使命感とビジョンをきちんともっており、これが成功へと導いたのである。
- (2) 新しいテクノロジー : 図書館の仕事の能率をあげながら、登録メンバーに新しいサービスをより早く能率的に紹介するためのテクノロジーである。「図書館の自動化や、図書館業務のリエンジニアリングの必要性」(1)・経済性を考え、「図書館のプロセスごとに導入すべき技術項目」(1)を決めた。
- (3) 人的管理 : 新しい時代に必要な図書館員のための教育システムの整備と優秀なスタッフが、ここで働き続けたいと思わせる待遇改善の提言をした。NLBは有能で献身的なスタッフが、組織の成功の鍵をにぎっていると強く感じている。そのためHay Consulting Groupに図書館の仕事全般、昇進、報酬などを見直すように依頼し、より良いものにした。また、適任なスタッフには大学院への進学の手配や、その他有用な資格を取得するために援助するという企画も示した。

NLBは急速に変わりつつある国民の要求や期待にこたえて、便利で役に立ち、活用できる図書館のコレクション、よりよいサービス、快適な設備を提供することを追求した結果、1995年当初より、利用者は5倍に増えた。貸出率も1010万冊から3480万冊と3倍以上になった。セルフサービス貸出機(コンピュータ貸出機)導入により、利用者はIDカードで所定の場所に本を置くだけで、本に内蔵されているチップによって貸し出し手続きは完了する。所要時間1分程度である。ピーク時には60分であった待ち時間が平均して5分弱になった。また図書館IDカードを作るのもコンピュータででき、シンガポールの人口の2人に1人、つまり約210万人もの人が図書館の登録メンバーになったのである。

国家主導型であるシンガポールの政策について、呑海氏が「政府主導型で進められているシンガポールの情報政策ではあるが、その視点は政府だけではなく、確実に個人にむけられている。[中略]シンガポールのインテリジェント・アイランド計画のソフト面は、図書館を中心に、静かに進行中である。」(2)と述べているとおり、国民と図書館との距離は確実に近づいたのである。

シンガポールの教育政策は「エリート教育」(3)という特色をもっているとされるが、その高校生と日本の高校生とを比較した興味ある研究結果が、2003年9月に日本社会教育学会で発表された(4)。そこではそれぞれの国が校種や成績で5段階にわけ比較検討されている。

注目すべき点は以下の3点である。まず家庭や図書館での校外学習時間は(塾や予備校での勉強時間は省く)調査対象の高校生全体の平均を比べると、シンガポールが106分、日本が87分と、シンガポールの高校生の勤勉ぶりがうかがえるが、問題は実は学校間隔差にある。成績上位校、下位校別に校外学習時間を比べると、日本の成績上位校が191分とシンガポールの上位校と比べて1時間以上も長いのに対し、下位校では、日本の17分に対してシンガポールは5倍以上とされている。日本では上・下位間の格差が極めて大きいのに、シンガポールは1時間と少ない。

次いで学校の授業の中で「大学で教育を受けるために必要な、基礎的な学力」をどれくらい身につけているかについての調査である。質問は4段階で度合いをたずねたが「身につけている」

「まあ身につけている」と答えたのは、日本では平均 4 割、シンガポールは平均 7 割であった。日本の成績のふるわない高校ほど、消極的な回答が目立つのに対して、シンガポールはいくつかの項目で、成績が振るわないとされる高校で、上位校に並ぶ回答が目立つことである。

最後に「受験制度は公平だ」という考えに同意する高校生の割合を調べた結果は、日本の上位校が 6 割で、下位校が 5 割弱と減るが、シンガポールはその逆であった。上位校が 6 割に対して、下位校は 75% 近かった。

この結果をみて、研究グループの一員で東京大学大学院博士課程のシム・チュン・キャット氏は「母国では、成績下位といわれる学校の生徒の不満が出ると予想したが逆だった。技術教育校（成績下位校一引用者）は卒業生や企業を調査し、ついた仕事と合うよう教育内容を常に見直している。学力ではなく技術力で評価し、優秀なら大学への道も開けている。教師が学ぶ意味を強く説き、卒業生の成功体験の出版物を配る工夫もある。政府が膨大に投資し、最新の機器が並んでいることも自信回復につながっていると思う」（4）と述べている。

客観的には、もちろん成績上位者の方が明るい未来を約束されている。これはシム氏の「予想外」とであると言う発言からもうかがえる。しかし「自国の教育制度は国際的に優れている」と思っているのは、日本の成績下位者が 18.1% であるのに対し、シンガポールの成績下位者は 83% と高率である。また、先生が「わたしがよい成績をとることを期待している」と思っている生徒はシンガポールの方が日本よりも多かった(5)。そのことから、シンガポールの中等教育政策は成果をあげているようである。

もっとも、シンガポールの教育については、「競争」と「効率」を「復古主義」と規定し、ポスト産業主義の社会ではこの方式は危ういと、指摘する佐藤学氏のような議論もある(6)。

以上、とにかく、若者の学習意欲の低下など「疲労」が目立つ日本に対して、シンガポールの教育は、「活気」があるように見受けられる。この状況と図書館がどう関わるのかという面からも、シンガポールの図書館行政は私たちの関心を引くところである。

引用文献

- (1) 原田勝・永田治樹、「シンガポールにおける図書館・情報サービス活動の現状」、学術情報ネットワークの基盤構造に関する調査研究—アジア・太平洋地域における— (SISNAP Report;5)、文部省科学研究費国際学術研究学術調査（研究課題番号：06041014）平成 7-8 年度研究報告、1998、PP. 47-48.
- (2) 呑海沙織、シンガポールの図書館 IT 戦略、カレントアウェアネス、[CA1499]、No. 276、2003、P. 21.
- (3) 田村慶子、頭脳国家シンガポール、講談社現代新書、1993、PP. 135-164.
- (4) 朝日新聞、日刊、2003 年 10 月 5 日.
- (5) シム・チュン・キャット (SIM CHOON KIAT) 下位校からみる日本とシンガポールのメリトクラシー 日本教育社会学会大会発表論文集、2004 年、東北大学、PP. 130-131.
- (6) 佐藤学、習熟度別指導の何が問題か、岩波ブックレット、No. 612、P. 27.

参考文献

- ・ 井上健太、シンガポール DIY 図書館、カレントアウェアネス、[CA1517]、No. 279、2004、PP. 5-6.
- ・ 長田秀一、シンガポール「IT2000」と国立図書館、カレントアウェアネス、[CA1136]、No. 215、1997、PP. 4-6.

- ・ 小田嶋ひとみ、補佐職員の実態—シンガポールの例—カレントアウェアネス、[CA1362]、No. 257、2001、PP. 7-8.
- ・ 綾部恒夫・石井米雄、もっと知りたいシンガポール[第2版]、弘文堂、1994.
- ・ 田村慶子、エリア・スタディーズ シンガポールを知るための60章、明石書店、2001.
- ・ 杉本 均、“シンガポールの競争選抜社会とマイノリティの子ども教育”、21世紀を展望した子どもの人間形成に関する総合的研究、伊藤忠記念財団調査報告 36、創造社、2001、PP. 218-250.
- ・ 耳塚寛明、「メリトクラシー規範の比較教育社会学」平成 13-15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 課題番号：13571009.
- ・ National Library Board Singapore Newsletter: August/September 2004 (online)available from <http://www.nlb.gov.sg>(accessed 2004. 10. 4.)

ふくい けいこ (京都大学教育学部図書室)



図書館あれこれ

大綱 浩一

次の文章は、主に京都大学の教職員向けに、図書館はどんな組織で、どんなことをしているのか、といったことを紹介するために書いた記事を転載したものです。

■はじめに 以下、大きい割には微妙に目立たない組織「図書館」について、紹介します。

■大学における図書館の役割 図書館は、利用者と学術情報を繋ぎ教育研究を支援する、大学の

サブシステムです。大学図書館基準(昭和 27 年制定、昭和 57 年改定)にあるように、大学における教育研究の基盤施設として、学術情報を収集・組織化・保管し、これを利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、効果的に提供することを主な機能としています。

■**図書館を構成する要素** 図書館には第 1 に利用者、第 2 にその利用者が必要とする学術情報、第 3 にその学術情報を収集・組織化・保管し利用者に提供する場としての空間、そして第 4 にその空間を整備し、利用者と学術情報を繋ぐ職員が不可欠です。どの要素が欠けても図書館の役割は果たされません。

■**図書系職員の採用** 戦後しばらく(1950-59)は特殊資格職員として選考任用され、給与法改正(1957.04)時に級別定数上、図書館職員として別枠とされました。その後、国立大学図書館専門職員採用試験(1960-63)、国立学校図書専門職員採用試験(1964-70)、国家公務員採用試験[図書館学](1971-2003)によって採用されるようになり、国立大学法人化後も図書業務二次専門試験による採用が行われています。

■**図書系業務** 古典籍や特殊言語資料を含む学術情報の選択・収集から始まり、次に収集した学術情報を扱いやすいように組織化し、配置・保管します。これでようやく準備が整いましたので、次は利用者と学術情報を繋ぎます。利用者の求めに応じ資料を貸出・返却したり、学術情報を探すお手伝いをしたり、ときには学術情報を提供したりします。また、学内にない学術情報を国内外の他機関から取寄せたり、利用者が訪問を希望する場合には斡旋したりもしています。

■**新たな役割** 情報社会の進展に伴い、多様で膨大な情報源の中から必要な情報を主体的に探索・入手し、さらに入手した情報を正しく評価し活用する能力(情報リテラシー)が極めて重要な意味を持つようになりました。図書館も学術情報を扱う専門組織として、情報リテラシー教育の一翼をなす全学共通科目「情報探索入門」を平成 10 年度から支援しています。また、整備されたネットワークや増加する電子コンテンツを有効に活用すべく、図書館の電子化を進めています。

■**学内外における図書館の連携** 学内的には約 50 の図書館(室)が相互にネットワークを形成し、「調整された分散方式」のもと運営しています。また、学外的には外国雑誌センター館(理工系)として、国立大学図書館協会を通じて、国立情報学研究所や他大学の図書館等と連携して、学術情報システムを形成しています。

■**国立大学図書館協会** 国立大学等の図書館を会員とする組織で、会員間の緊密な連携と協力により、図書館機能の向上を支援するとともに、広く学術情報資源の相互利用の推進、学術情報流通基盤の発展に貢献し、もって大学の使命達成に寄与することを目的としています。国立大学図書館の機能向上に関し必要な調査研究、学術情報資源の共同整備と相互利用の促進、図書館職員の資質向上のための事業、及び学術情報流通に関する国内外の団体との連携・協力等の事業を行っています。(国立大学図書館協会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/>より)

■**国立情報学研究所** 学術情報ネットワークの構築・運用、大学図書館等の所蔵する図書・雑誌の総合目録の作成、学術情報データベースの形成・提供や大学図書館職員に対する教育・研修等の事業を通じて、我が国の学術情報基盤整備において重要な役割を果たしています。(国立情報学研究所 <http://www.nii.ac.jp/>より)

おおつな こういち (京都大学附属図書館)